

は……。「ハルジョン。」「ピンポーン。」等と野草クイズも楽しむ様になり、ヘビイチゴ、キシヨウブなど次々とその名前を当て、親子レクに同行のお母さんたちをびつくりさせる。好きな野草をスケッチする楽しみも覚えた。S子の描いた絵の下には「校いでやそうをさがしました。きつねのぼたんをとりました。くりのいがみたいなみがついていました。おもしろい名まえだとおもいました。」と書かれていた。ここまですく

失敗

堀川 幸一

糸を落とした海底は、どんな地形か、砂地か、藻は多いか。海水の流れやカレイやハゼ、アイナメなどの浦魚は、どのような動きをしているのかなどと考えながら釣りをするのが好きで、小学生のころからの何よりの楽しみである。

理科室に、近海に見られる魚を飼いはじめたのは、昨年の九月だった。準備に当たり、水産試験場に行つて聞いたり、魚に詳しい行きつけのたばこ屋の主人に相談したり、生けずを使っていつも新鮮な魚を食べさせ

ると、今まで気づかなかつた野草の特徴が見えてくる様になり、野草への愛着が増していった。「四季の野草」との出合い、自然教室でのさまざまな活動が、自然とふれ合うことのすばらしさを教えてくれた。

これからも、子供たちと共に身近な自然に足を運び、自然に対する素直な感動を持つことと、自然の恵みの中で生きている安らぎを大事にしていきたいと思つている。

(泉崎村立泉崎第一小学校教諭)



てくれる割烹の若旦那に装置を見せてもらつたりした。話を総合すると、水温を一定にすることや、きれいな海水を循環させることがポイントのようである。いろいろと考えた末に、循環装置を使い、日の当たらない廊下で育てることにした。定温装置を取り付け代わり、定期的に海水を交換することにした。

取り付けた翌日から早速子供たちに反応が見られた。休み時間ごとに水槽を取り巻く子供たちが増えてきた。餌のイソメを持つてくる子など

予想外の反応に私自身が驚いた。その後、子供たちの観察によると、カレイの体に変色することやアイナメには縄張りがあることなどが分かった。また、水槽の壁面で育つ海藻について調べることができた。ある子供に「鯊」という漢字を見せられ、私は分からず「まいった。」と言わされることもあった。

循環装置を使っていることもあり、海水の蒸発する量が結構多い。海水を補充するだけでは、塩分が濃くなることも考えられるので、海水は三週間ごとに交換することにした。簡単な装置にもかかわらず、三月上旬まで、どの魚もみな元気だった。

ところが、図書室の書庫を移動する際、誤つて水槽が壊れてしまった。担任の先生から連絡を受けて急いで行つてみると、子供たちにはけががなかったのほつとした。魚はとりあえず真水に入れておき、放課後、海水に入れたがどれもだめだった。毎日世話をしていた子供たちに、落胆の色は隠せなかった。壊した子供たちは私に謝りに来たが、彼たちには何の罪もない。廊下に水槽を置いた私が悪いのである。子供がけがをしていたらと考えるとぞつとする。子供たちには本当に悪いことをしてしまつたと思う。

「また釣りに行くの?」という家族の声をよそに、この失敗を生かしてまた海の魚を飼い、魚に興味を示して目を輝かせる子供たちの表情を見てみたいと思うこのごろである。

(原町市立原町第二小学校教諭)

子供だからこそ

青木 清子



春休み最後の週末、子供たちにねだられ家族で上野の国立博物館、科学博物館、西洋美術館めぐりを楽しんできました。どの館内にもぎわっていました。特に科学博物館は小学生連れの家族で盛況を見せていました。私達も初日の二時間では足りず次の日もまる一日を費やしたほどでした。その中に、あの久ノ浜で発見されたフタバスズキリュウが、どんなふうに見えられたのかを最新のメカニズムや映像音響を使って動く自然史展示で、物語風に子供向けに